

幼児の意図に基づく向社会的評価の発達：
道具的援助場面に着目した予備的検討

廣戸健悟（東京大学）

Development of prosocial judgments about failed helping in preschoolers:
Preliminary Study Focusing on instrumental helping situations

Kengo Hiroto

Author's Note

Kengo Hiroto is a PhD Student, Graduate School of Education, The University of Tokyo.

Abstract

Previous study has often focused on the development of the “actor” and has paid less attention to the development of the “recipient”. However, examining how recipients evaluate is essential to understanding the development of prosociality. In this study, we investigated the task of using puppets to present visual stimulus to 3-year-old and 5-year-old children, and rated the skill, prosociality, selectivity and effort of each actor with different frequency of helping. The hypothesis of this study is that 5-year-olds will evaluate the actor who helped 3-time more prosocially than the actor who helped 1-time compared to 3-year-olds. The results of the analysis showed that there was no age difference in the prosociality question, and the hypothesis was not supported. In the effort question, 5-year-olds tended to choose the 3-time helper more often than the 1-time helper compared to 3-year-olds. Thus, this study demonstrated 5-year-olds attributed more times of assistance to the evaluation of others’ effort than did 3-year-olds.

Keywords: prosocial behavior, moral judgment, intention, preschoolers

キーワード：向社会的行動，道徳的判断，意図，未就学児

幼児期の意図に基づく向社会的評価の発達

道具的援助場面に着目した予備的検討

1 問題と目的

向社会的行動 (prosocial behavior ; 以下 PB とする) とは、援助、協力、寄付、分配のような他者にとって利益となる行動と定義される (Eisenberg et al., 2015)。また、PB の個人差の傾性を向社会性 (prosociality) と定義する (Caprara, et al., 2012)。ヒトは他の種に比べて向社会性を身近な他者だけでなく、身近な他者以外の個人、あるいは個人を含めた集団に向けることが可能であり、その傾向は異なる文化圏においても同様にみられる (Zaki & Mitchell 2013)。そのため、向社会性はヒトが社会生活を円滑に営む上で必要不可欠な社会的コンピテンスであり、他者との関係性を構築・維持する上で重要な概念であると考えられている (Helliwell & Putnam 2004)。

これまで、乳幼児期を扱った実験研究では、統制された状況下で大人に対して PB を行う実験室実験が多く採用されてきた (Köster & Kärtner, 2019)。その中で、発達早期の段階から、乳児が他者に対して向社会的な態度や行動を示すことが確認されている (e.g., Kanakogi et al., 2013; Liszkowski et al., 2008)。しかし、本来 PB というのは行為の与え手である「行為者」とそれを受け取る「受け手」の二者の間で成り立つ行為である。従来は、いわゆる「行為者」の発達が重点的に検討されてきた一方で、いわゆる「受け手」の発達についてはわずかな研究 (e.g., 加藤ら, 2012) を除いて相対的に希薄であった。例えば、加藤ら (2012) は集団保育場面の観察によって、PB を向けられやすい受け手の様相を明らかにしている。しかし、実際の

PB に対して受け手である幼児がどのような評価を下すかについて実証的に検討した研究は未だない。従来は、統制された状況下における大人に向けた PB の実行が測定されることが多く、幼児が実行する PB が他者の利益に結びつくことが暗黙裡に想定されていた。しかし、日常生活において、他者や他者の置かれた状況に対して常に適切な PB が行われているとは限らない (Waugh & Brownell, 2017)。PB は他者のニーズに対する解釈に基づいた反応であり、その解釈は他者自身のニーズとは異なる場合がある (Dunfield & Kuhlmeier, 2013)。そのため、日常場面で他者が一見同一のディストレスを表出している場合でも、ディストレスが生起する要因は複雑で文脈ごとに異なり (Francis et al., 1999)、大人でも常に適切な援助ができるわけではない (Tunçgenç & Cohen, 2016)。特に、子ども同士のやりとりの場合、はじめから有効な PB を実行できない、またその PB を受容できない機会が多いことも報告されている (若林, 2002 ; Waugh & Brownell, 2017)。幼児は発達早期の段階から PB を実行することができる一方で、社会情動的スキルに関わる能力の制約から常に有効な PB を初めから実行することは難しい可能性がある。そのため、受け手となる幼児は行為者に対して、行為者がもたらす行為の結果ではなく、そこに含意される向社会的な意図を汲み取るスキルが求められる。

他者の意図理解を検討した向社会性研究では、3 歳ごろから意図的な行動と偶発的な行動の区別が可能であることが示されてきた (Baumard et al., 2012; Carpenter et al., 1998; Vaish

et al., 2010)。Vaish et al., (2010) では、3 歳児が意図的に危害を加えた大人に比べて偶発的に危害を加えた大人に対して援助する傾向が示されている。また、Baumard et al. (2012) では、3 歳児が結果の程度に関わらず、怠け者の相手に比べて働き者の相手に対してより多く分配を行うことが示されている。これらの結果は、幼児が 3 歳ごろから他者の意図を考慮した判断が可能であることを示している。また、4~5 歳ごろはその傾向がさらに顕著になる。3~6 歳を対象とした研究において、努力と結果が一致しない物語を呈示したところ、年齢の増加とともに結果よりも努力を重視する傾向が強まることが示されている (Noh et al., 2019)。また、3~8 歳の子どもたちは、低年齢の子どもほど登場人物に危害を加える意図がない他者に対して意図を誤って解釈する傾向があることが報告されている (Nobes et al., 2009)。これらの結果を踏まえると、幼児では 3 歳ごろから他者の意図を理解することが可能になるが、依然として結果を重視する場面も多く、年齢の増加とともにより正確に意図を汲み取る傾向が顕著になると言える。

以上を踏まえて本研究では、他者の意図を考慮することが可能となる 3 歳児と 5 歳児に焦点をあて、その年齢的差異を検討する。具体的には、幼児が他者の助けようとする意図を汲み取り向社会性を評価するのは何歳ごろかを検討する。そのため、本研究では、PB の成功および失敗を統制するという目的から、映像刺激を用いた実験場面で実施する。また、大人を対象とした研究では、コストの大きい PB をより向社会的であると判断することが示されている (Kawamura et al., 2020)。そのため、他者の意図理解が可能な 5 歳児は、コストの大きい援助に

対してより向社会的であると判断することが考えられる。そのため本研究では、援助回数が異なる場面を提示し向社会性を評価する。具体的には、「1 回の援助を行う場面」と「同一の相手に対して 3 回の援助を行う場面」を対呈示し、どちらの援助者を向社会的と評価するかについて検討する。また、大人の印象評価を検討した研究では、「温かさ」と「有能さ」という 2 つの次元から評価されることが多い (e.g., Fiske et al. 2007)。そのため、本研究では向社会性と援助スキルについての評価を区別して捉える。以上を踏まえ、本研究では以下 2 つの仮説を検証した。

仮説①：どちらの年齢でも 1 回援助者を連続援助者に比べて有能さを高く評価する。

仮説②：5 歳児は 3 歳児に比べて、連続援助者を 1 回援助者に比べて向社会性を高く評価する。

2 方法

2.1 実験参加者

私立認定子ども園に通う、3 歳児クラスと 5 歳児クラスの幼児を対象に個別実験を行なった。その内訳は、3 歳児クラス 12 名 (男児 6 名、女児 6 名、平均年齢 4; 2, レンジ 3; 10-4; 10)、5 歳児クラス 16 名 (男児 7 名、女児 9 名、平均年齢 6; 4, レンジ 5; 11-6; 10) であった。

2.2 材料

初めに、向社会性判断課題で使用するための映像刺激を作成した。映像刺激は動物パペットを用いて独自に作成した課題であった。使用した動物パペットは援助者役の 2 体、被援助者役の 1 体、確認課題で登場する 1 体の計 4 体であった。向社会性判断課題では、援助を行う援

助者パペットと被援助者パペットの2体が登場した。また、映像刺激のシナリオは以下の通りである。

ボールで遊んでいた被援助者パペットが誤って手の届かない位置にボールを乗せ、その様子を目撃した援助者パペットが道具を使用してボールを取ろうとする。

また、援助回数によって2つの条件を設けて映像で呈示した（(1)ハシゴのみを使用する1回援助条件、(2)ホウキ→イス→ハシゴの順で使用する3回援助条件）。なお、どちらの条件でも最終的にボールを取ることに成功した。

2.3 手続き

実験は、参加児が通う園内の一室で、著者と子どもとの面接形式で実施した。最初に、参加時にクラス、名前、年齢、誕生日を尋ねた。次に、確認映像を提示し2問の確認質問を実施した。その後、向社会性判断課題を実施するため2種類の援助映像（図1）を用いて、参加児を提示する順に従って2条件のいずれかに割り当て

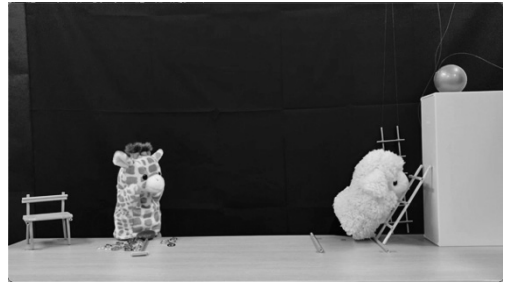


図1 映像例

た。提示する条件と映像内に登場するパペットについてはカウンターバランスをとった。各援助映像提示後、2つの確認質問を実施した。一つは援助者パペットの名前を尋ねる援助者質問、もう一つは援助者パペットが使用していた道具を尋ねる道具質問であった。確認質問は、全部で4回実施したが、いずれかの質問で参加児が間違えた場合は、直前の映像をもう一度視聴しフィードバックを与え、もう一度質問を行なった。分析では確認課題を通過していない3歳児3名を除き、3歳児9名と5歳児16名を対象とした。全ての確認質問で正しい選択肢を選んだ参加児は、比較質問へと進んだ。比較質問は、①スキル質問（「助けるのが上手なのはどちらかな？」）、②向社会性質問（「優しいのはどちらかな？」）、③選好質問（「もし（参加児名）ちゃんが困っていたら、助けて欲しいのはどちらかな？」）、④努力質問（「キリンさんのボールを頑張って取ろうとしていたのはどっちだったかな？」）の4問から構成された。実験者は、参加児の回答に対して明確な正誤のフィードバックを与えず、「なるほどね」や「うんうん」と相槌を打ってから次の質問を実施した。なお、④努力質問は確認課題として位置付けていたため、残りの①～③のみカウンターバランスをとった。また、質問時にはパペットの画像を対提示

表1 課題の流れ

1回→3回条件	3回→1回条件
1. 確認課題映像 → 確認質問（2問）	1. 確認課題映像 → 確認質問（2問）
2. 1回援助映像 → 確認質問（2問）	2. 3回援助映像 → 確認質問（2問）
3. 3回援助映像 → 確認質問（2問）	3. 1回援助映像 → 確認質問（2問）
4. 比較質問（4問） ①スキル質問 ②向社会性質問 ③選好質問 ④努力質問	4. 比較質問（4問） ①スキル質問 ②向社会性質問 ③選好質問 ④努力質問

注：①～③はカウンターバランスをとる。

し、選択肢の違いを視覚的に理解しやすくした。また、質問後には回答の理由を尋ねた。課題の流れを表1に示す。映像はPower Pointを使用して提示した。映像例を図1に示す。

2.4 倫理的配慮

協力園の施設長に、研究目的と方法および結果の利用について、調査開始前に説明を行い、文書で同意を得た。また、それぞれの保護者には各クラスの担任から説明してもらい同意を得た上で観察を始めた。事前に個人情報やデータの扱いは研究目的に限り、個人が特定できない形で行うこと、調査の中止や中断はいつでも可能であることについて園に十分な説明を行い、了解を得た。また、参加児には、参加を断る自由や、いつでも参加を中断できる自由があることを説明するとともに、実験中は精神的苦痛を与えないように留意した。また、本研究は筆者の所属大学の倫理審査の許可を得た（審査番号：20-317）。

3 結果

はじめに、幼児の回答が提示順に影響を受けてなかったかを確認するために、課題に対して年齢（3歳・5歳）×行為者パペット（ヒツジ・ウシ）×提示順条件（1回→3回・3回→1回）で分散分析を行なった。その結果、提示順およびパペットの提示順について主効果はみられなかった。

次に、参加児の回答が1回援助者と3回援助者で各比較質問に違いがあるかを確認した。各比較質問の回答人数は表2に示した。各比較質問について、年齢差を検討するため、選択肢ごとに生起比率を用いて二群の比率の差の検定を行った（図2）。分析の結果、①スキル質問につ

いては年齢による違いはみられなかった（ $\chi^2(1, N=23)=0.29, n.s.$ ）。また、②向社会性質問についても年齢による違いはみられず（ $\chi^2(1, N=23)=2.00, n.s.$ ）、いずれの年齢においても1回援助者と3回援助者を同程度の割合で選択していた。③選好質問についても年齢による違いはみられず（ $\chi^2(1, N=23)=0.00, n.s.$ ）、向社会性質問と同様、1回援助者と3回援助者を同程度の割合で選択していた。④努力質問については有意傾向ではあるが、年齢による違いがみられ（ $\chi^2(1, N=23)=5.52, p<.01.$ ）、5歳児は3歳児に比べて3回援助者を多く選択していた。

また、対象児には比較質問への回答後、選択

表2 比較質問の回答人数

		1回援助者	3回援助者	両方
スキル質問	3歳児	7 (78%)	2 (22%)	0 (0%)
	5歳児	15 (94%)	1 (6%)	0 (0%)
向社会性質問	3歳児	4 (44%)	5 (56%)	0 (0%)
	5歳児	5 (31%)	8 (50%)	3 (19%)
選好質問	3歳児	5 (56%)	4 (44%)	0 (0%)
	5歳児	9 (56%)	7 (44%)	0 (0%)
努力質問	3歳児	5 (56%)	4 (44%)	0 (0%)
	5歳児	2 (13%)	13 (81%)	1 (6%)

注：カッコ内は全体の人数における比率を表す。

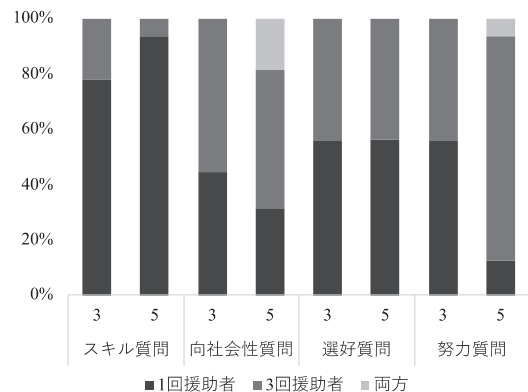


図2 各比較質問における年齢ごとの比率

した回答の理由を尋ねた(表3)。回答理由をカテゴリーに分類した結果以下の4つに分類された(援助者の援助意図について言及した【意図】、援助の回数や速さなどについて言及した【行動】、援助の成功・不成功について言及した【結果】、パペットの色や動物の見た目などについて言及した【その他】)。質問ごとの年齢による違いを検討した結果、①スキル質問においては、3歳児でのみ「助けてあげたかったから」といった【意図】についての回答が一部みられたものの、それ以外の回答としては年齢に関わらず【行動】についての言及が大半を占めた。具体的には「早かったから」「1回で取れたから」など、援助回数や援助の速さなどについて言及する場合が多くみられた。②向社会性質問においては、「頑張ってるうとしていたから」「諦めずに取ってたから」などの【意図】に言及した回答と、「どっちも助けてあげたから」「ボールを取ったから」といった【結果】に言及する回答が5歳児でのみみられた。一方で、3歳児は「可愛いから」「可愛い目をしていたから」といった【その他】の回答が多くみられた。③選好質問においては、年齢に関わらずカテゴリーによる偏りはみられなかった。具体的には、「一発でできたから」といった【行動】への言及や、「届かなかったから」といった【結果】への言及、「可愛かったから」といった【その他】への言及などがみられた。④努力質問においては、年齢による違いはみられず、「色々考えたから」といった【意図】への言及、「早く取ってたから」といった【行動】への言及、「届かなかったから」といった【結果】への言及などの回答がみられた。

4 考察

本研究の目的は、援助回数の異なる援助者に対して向社会性などの評価が年齢によってどのように異なるかを検討することであった。本研究の主要な結果は以下の通りである。1) スキル質問では、年齢に関わらず1回援助者を3回援助者に比べて多く選択する傾向がみられた。2) 向社会性質問では、年齢に関わらず1回援助者と3回援助者を同程度の割合で選択する傾向がみられた。3) 努力質問では、5歳児のみ3回援助者を選択する傾向がみられた。

スキル質問については、年齢に関わらず1回援助者を3回援助者に比べて助けるのが上手だと判断しており、仮説①は支持された。回答理由を比較したところ、「早かったから」「1回で取れたから」などの回答が両年齢でみられ、ほとんどの子どもが援助回数と援助の上手さ(有能さ)を結びつけていることが示唆された。

向社会性質問については、いずれの年齢でも選択に偏りはなく、仮説②は支持されなかった。両年齢でいずれも回答はチャンスレベルを下回り、5歳児でも3回援助者を1回援助者に比べて向社会的であるとは判断していないことが示唆された。回答理由を比較したところ、5歳児でのみ「頑張ってるうとしていたから」「諦めずに取ってたから」といった援助回数の多さを向社会性と結びつける【意図】についての言及がみられた。この結果は、年齢の増加に伴い結果よりも意図を重視するようになるという先行研究の結果(Noh et al., 2019)とも一致する。その一方で、3歳児や5歳児でパペットの見た目などに言及する【その他】への言及もみられた。そのため、対象児は向社会性を判断する上で援助者の援助回数にのみ着目しているわけではないことが推測される。また、5歳児では2名(16

名中) が提示した選択肢のいずれでもない「両方」という回答がみられた。回答理由としては「どっちも助けてあげたから」「ボールを取ったから」といったものが挙げられ、両者の向社会性を高く評価した上でどちらか一方を選択することは難しいという判断を下していた。本研究で使用した刺激はいずれも最終的に援助に成功するシナリオであったため、両方と回答した2名の対象児は援助回数ではなく援助結果と向社会性を結びつけて判断していた可能性が推察される。そのため、今後は援助が失敗した場面の比較を行うことで、援助結果と援助回数を比較

することが可能になる。

また、本研究では頑張っていた援助者を問う努力質問において年齢差がみられた。努力質問は他の3つの質問を行う上での確認質問として位置付けていたため、年齢による違いはみられないと想定していた。しかし、5歳児は3歳児に比べて3回援助者を1回援助者に比べ頑張っていたと判断しており、年齢による違いがみられた。この結果は、3歳児が援助回数の多さをコストの高さに結びつけて判断していないことを表している。回答理由を比較すると、1回援助者を選択した5歳児の中には「早かったから」

表3 回答理由のカテゴリー

質問	カテゴリー	回答例
①スキル質問	意図	助けてあげたかったから (3歳児/3回援助者) ヒツジは全部優しかったから、ウシさんは間違っていたから (3歳児/1回援助者)
	行動	早かったから (3歳児/1回援助者)
		[3回援助者]の方が取るのが遅かったから (5歳児/1回援助者)
		[1回援助者]は一回で取れたから (5歳児/1回援助者)
		一つ目ではしごって気づいたから (5歳児/1回援助者)
②向社会性質問	意図	最初は箸を取って、届かないけど他のやつを使って頑張って取ろうとしていたから (5歳児/3回援助者)
	結果	何回も取れないけど諦めずに取ってたから (5歳児/3回援助者)
		どっちも助けてあげたから (5歳児/両方)
		ボールを取ったから (5歳児/両方)
		可愛いから (3歳児/1回援助者)
その他	ピンク色で優しいかなーと思って (3歳児/1回援助者) [3回援助者]の方が可愛い目をしていてから (5歳児/3回援助者)	
③選好質問	行動	上手いから。はしごでボール取ってるから。 (5歳児/3回援助者) 助けてもらうの(方法)が多いから (5歳児/3回援助者)
	結果	一発で出来たから (5歳児/1回援助者)
		届かなかったから (3歳児/1回援助者)
		可愛いから (3歳児/1回援助者)
		可愛いしもふもふしてるから (5歳児/1回援助者)
④努力質問	意図	取ろうとしていたから。 (3歳児/3回援助者) 色々と考えたから (5歳児/3回援助者)
	行動	取るのが遅くて諦めずに頑張っていたから (5歳児/3回援助者)
		早く取ってたから (5歳児/1回援助者)
		届かなかったから (3歳児/1回援助者)
		何回も取っていたから (5歳児/3回援助者)

と援助回数が少ないことを「頑張っていた」と結びつけるケースや、3歳児では「(ボールに)届かなかったから」と、3回援助者が見せた援助の失敗に着目して回答するケースなどがみられた。今回の調査で登場した3回援助者は連続で失敗しながらも最終的には援助に成功していた。そのため対象児の中には、3回援助をすることをコストの高さに結びつけるのではなく、失敗を繰り返したのち偶然成功したと判断していた可能性が考えられる。

本研究に関しては二つの限界点が挙げられる。第一に、サンプル数の問題である。本研究の分析対象は、3歳児と5歳児合わせて25名と、統計的な分析を行うためには十分なサンプル数であったとは言い難い。特に、3歳児については、12名中3名が確認課題を通過できず、確認課題の難易度が高かった可能性も考えられる。そのため、対象年齢についての吟味も行いながら、今後はサンプル数を増やし、本研究で得られた結果と同様の傾向がみられるかを検討する必要がある。第二に、教示の方法である。本研究では、向社会性質問では援助者の向社会性を問うため「優しいのはどっちだったかな」と教示を行なった。しかし、上記で触れたように、対象児の回答理由の中にはパペットの見た目や実際の動物をイメージした回答が得られており、対象児ごとに優しさをどのような側面から捉えるかについての解釈が子どもによって異なっていた可能性が考えられる。また、努力質問においては「頑張っていたのはどっちだったかな」という教示を行なった。例えば「ボールを取るために頑張っていたのはどっちだったかな」のようにより具体的な教示に変更することで対象児の正答率が上昇する可能性も考えられる。Nobes et al. (2016) は行為者の行動を尋ね

るよりも行為者自身について質問した方が意図に基づいた判断が増加すると報告している。また、事前質問を追加することで3歳児でも4-5歳児と同等のレベルで意図に基づいた判断が可能であることも指摘されている (Margoni & Surian, 2020)。質問の言い回しについての工夫や手続きの変更が子どものパフォーマンスに影響を与える可能性があり、今後検討する必要がある。

以上の限界点はあるものの、本研究の結果は幼児期における向社会性の発達を議論するための重要な視座を与えるものである。今後の展望として、援助が失敗に終わる場合の1回援助条件と3回援助条件の比較を行うことで、援助の帰結についての比較を行うことが可能となる。また、幼児に限らず児童や大人を対象に含めて検討することで、幼児期から射程を広げた向社会性の発達を捉えることが可能になると考えられる。

参考文献

- 加藤真由子・大西賢治・金澤忠博・日野林俊彦・南徹弘 (2012). 2歳児による泣いている幼児への向社会的な反応：対人評価機能との関連性に注目して、発達心理学研究, 23, 12-22.
- 若林紀乃 (2002). 幼児の向社会的行動方略の生起過程：自発的に思いやりを表現することの難しさ, 広島大学大学院教育学研究科紀要, 51, 375-380.
- Baumard, N., Mascaro, O., & Chevallier, C. (2012). Preschoolers are able to take merit into account when distributing goods. *Developmental Psychology*, 48(2), 492-498.
- Caprara, G. V., Alessandri, G., & Eisenberg, N.

- (2012). Prosociality: The contribution of traits, values, and self-efficacy beliefs. *Journal of personality and social psychology*, 102 (6), 1289.
- Carpenter, M., Akhtar, N., & Tomasello, M. (1998). Fourteen-through 18-month-old infants differentially imitate intentional and accidental actions. *Infant behavior and development*, 21 (2), 315-330.
- Dunfield, K. A., & Kuhlmeier, V. A. (2013). Classifying prosocial behavior: Children's responses to instrumental need, emotional distress, and material desire. *Child Development*, 84, 1766-1776.
- Eisenberg, N., Spinrad, T. L., & Knafo-Noam, A. (2015). Prosocial development. *Handbook of Child Psychology and Developmental Science*, 1-47.
- Fiske, S. T., Cuddy, A. J., & Glick, P. (2007). Universal dimensions of social cognition: Warmth and competence. *Trends in cognitive sciences*, 11(2), 77-83.
- Francis, L., Monahan, K., & Berger, C. (1999). A laughing matter? the uses of humor in medical interactions. *Motivation and Emotion*, 23, 155-174.
- Helliwell, J. F., & Putnam, R. D. (2004). The social context of well-being. *Philosophical Transactions: Biological Sciences*, 1449, 1435-1446.
- Kanakogi, Y., Okumura, Y., Inoue, Y., Kitazaki, M., & Itakura, S. (2013). Rudimentary sympathy in preverbal infants: preference for others in distress. *PloS One*, 8, 65292-65292.
- Kawamura, Y., Ohtsubo, Y., & Kusumi, T. (2020). Effects of Cost and Benefit of Prosocial Behavior on Reputation. *Social Psychological and Personality Science*, 1948550620929163.
- Köster, M., & Kärtner, J. (2019). Why do infants help? A simple action reveals a complex phenomenon. *Developmental Review*, 51, 175-187.
- Liszkowski, U., Carpenter, M., & Tomasello, M. (2008). Twelve-month-olds communicate helpfully and appropriately for knowledgeable and ignorant partners. *Cognition*, 108, 732-739.
- Margoni, F., & Surian, L. (2020). Conceptual continuity in the development of intent-based moral judgment. *Journal of Experimental Child Psychology*, 194, 104812.
- Nobes, G., Panagiotaki, G., & Bartholomew, K. J. (2016). The influence of intention, outcome and question-wording on children's and adults' moral judgments. *In Cognition* (Vol. 157, pp. 190-204). <https://doi.org/10.1016/j.cognition.2016.08.019>
- Nobes, G., Panagiotaki, G., & Pawson, C. (2009). The influence of negligence, intention, and outcome on children's moral judgments. *Journal of Experimental Child Psychology*, 104 (4), 382-397.
- Noh, J. Y., D'Esterre, A., & Killen, M. (2019). Effort or outcome? Children's meritorious decisions. *Journal of Experimental Child Psychology*, 178, 1-14.
- Tunçgenç, B., & Cohen, E. (2016). Movement synchrony forges social bonds across group divides. *Frontiers in Psychology*, 7, 782-782.
- Vaish, A., Carpenter, M., & Tomasello, M. (2010). Young children selectively avoid helping

people with harmful intentions, *Child Development*, 81, 1661-1669.

Waugh, W. E., & Brownell, C. A. (2017). “Help yourself!” what can toddlers’ helping failures tell us about the development of prosocial behavior? *Infancy: The Official Journal of the International Society on Infant Studies*, 22, 665-680.

Zaki, J., & Mitchell, J. P. (2013). Intuitive prosociality, *Current Directions in Psychological Science*, 22, 466-470.